

原発立地周辺地域から考える 3・11 までの／からの原子力と社会

開沼 博

東京大学大学院学際情報学府 博士課程

福島第一原子力発電所事故は日本社会に大きな衝撃を与えた。その衝撃は、例えば原子力行政や原子力産業に関する批判を喚起し、原発の技術的な仕組みや放射性物資と人体への影響に関する知識へのニーズを増やした。それらは事故後の社会やそこを生きる人々にとって当然欠かすことのできないものであり、今後も議論の対象となることは確かだろう。しかし、この事故自体は3・11後に急に起こったものではない。確かに3・11を契機にしてはいるが、それ以前からこのような事態になる条件が整えられていたからこそ現下の状況に至ったのは直視しなければならない事実だ。つまり、政治や経済、あるいは科学技術や医学といった個別の領域に課題を回収することなく、それが成立してきた社会がいかなるものだったのかということ自体を見直す必要がある。そこにこそ、そもそもなぜこのような事故が起こったのか、そして今後の社会をいかに構想すべきかという問いに対する答えの萌芽が見られるはずだからだ。

本報告では、3・11までの福島第一・第二原発がその立地地域にいかに形成され、いかなる社会を作ってきたのか、歴史的なプロセスを追いながらその背景とその先に生まれた3・11間際の状況を明らかにした上で、3・11からの原発立地周辺地域の社会がいかなる状況にあるのか提示していく。